

精神科デイケアにおける「付け句遊び」の有用性について

青山 宏*, 蒲 章 則*, 青山 真美**
小野 武也*, 村井 真由美*, 境 信哉*

The Effectiveness of a Play Therapy "Haiku Arrangement" on Psychiatric Day Care

Hiroshi AOYAMA, OTR, M.S.*, Akinori KAMA, M.A.*, Mami AOYAMA, OTR, M.S.**

Takeya ONO, RPT, M.S.*, Mayumi MURAI, OTR.*, Shinya SAKAI, OTR.*

Abstract : A kind of play therapy "Haiku Arrangement" was presented as a psychiatric day-care activity aimed to improve the communication of patients with others. The definite style of the Haiku-poetry (three verses with 5, 7 and syllables), of the arrangement (to reintegrate in the own piece the last verse of the preceding as the first verse), provide the effective framework of the self-expression. It was, therefore, indicated that the game is handy and useful as an introduction to the therapeutic programs and a breaking the ice for the verbal communication, although it seemed inapt for the individual therapeutic management due to the extracurricular character.

Key Words : Day Care, Haiku Therapy, communication

はじめに

詩歌のもつリズムなどのコミュニケーション機能を使った心理療法として詩歌療法が知られている¹⁾。わが国では短詩形の定型詩である俳句・連句が使用されることが多く、臨床における治療例も報告^{2,3)}されている。この俳句・連句療法では、句会という場や集団などの利用や、治療者・患者間で行われる作品の推敲などを通して治療操作が展開される。そのため、治療者は一定の熟練を要するなど、導入の難しさもある。そこで、筆者らは五七五の句型の馴染みやすさを活かし、なおかつ治療的側面よりは、遊びを通したコミュニケーションを図ることを目的に、「しりとり形式」の付け句遊びを利用している。今回、精神科デイケア

における付け句遊びの活動を紹介するとともに、若干の考察を加えて報告する。

活動の概要

活動の場は、地方都市にある民間の小規模精神科デイケアである。スタッフは、医師、作業療法士、心理療法士、看護婦であり、一日平均10名程度のメンバーが参加している。付け句遊びは、本来の活動プログラムとは直接関係ない形で行っている。あらかじめデイケア室の掲示板に巻き紙をはっておき、五七五で記載された前句の下の句を次句の上の句にして順次自由に句を続けるという、しりとり形式の句作を行っている (Fig. 1, Fig. 2)。メンバーやスタッフは、デイケアの活動プログラム前後や空き時間、昼休みなどを利用して自由に句を続け、巻き紙がいっぱいになれば新しい巻き紙を補充していくことにしている。その後、二ヶ月に1回全員で良句を選出、年に1回句集を作るという事になっている。句作はメンバーやスタッフの前でにぎやかに行われることもあれば、室に一人になった時に静かに行われることもある。ス

* 山形県立保健医療短期大学
〒990-2212 山形市上柳260番地
Yamagata School of Health Science,
260, Kamiyanagi, Yamagata, 990-2212, Japan

** 東北大学医学系研究科
〒980-8575 仙台市青葉区星陵町2-1
Department of Human Anatomy, Tohoku University School of
Medicine, 2-1, Seiryō-chō, Aoba-ku, Sendai, 980-8575, Japan

遠ざかる セピア色した 夏の恋
 夏の恋 日焼けとともに 薄らいで
 薄らいで 遠くにかすむ あのだ笑顔
 あのだ笑顔 ススキの光 暖かい
 暖かい みんな昼寝し 僕ひとり
 僕ひとり 月の夜道は 嫌いだよ
 嫌いだよ デイケアなんか 来たくない
 来たくない ふっとつばやき スタートだ
 スタートだ 私の心 風になれ
 風になれ
 つづく

Fig. 1 作品例。前句の下の句を次句の上の句として使用

スタッフは、デイケアの終了ミーティングで句を話題に取り上げたりし、コミュニケーションの手段として利用するよう配慮している。

症 例

症例1：20歳，男性，無職

診断名：精神分裂病の疑い

現病歴：小学校1年生時に「多動児」として小児センターに通院。しかし、その後は安定していた。高校に進学したころより、通学の電車の中で奇声を上げたり、踊るような動作をするなどがみられ病院受診。高校を卒業し専門学校に進学。そのころより再び、奇声を上げたり、器物を壊したり、独語がみられるようになり、再度、病院を受診した。その結果、「対人関係の学習・改善」を目的にデイケアを紹介され、通所を開始した。入院歴はない。

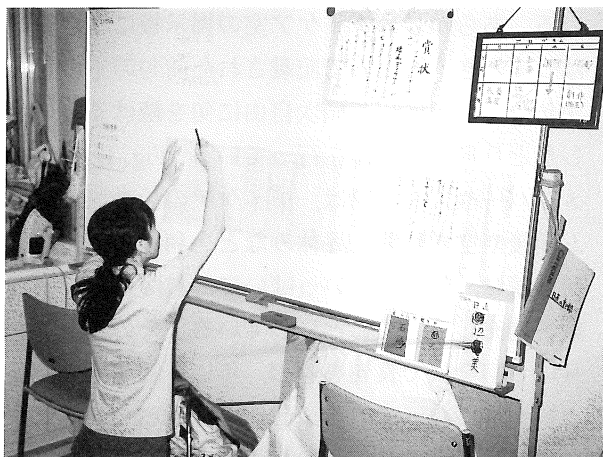


Fig. 2 掲示板に向かったの句作の様子

デイケアでの経過：デイケア通所を開始してからも、手をバタバタとはばたかせる、柏手を頻繁に打つなどの奇異な行動や独語が目立ち、デイケアの活動プログラムには十分に参加できずに部屋の出入を繰り返してばかりいた。他者との交流もほとんどみられず、時折、一方的に漫画の主人公の家族数を尋ねるなどのステレオタイプな質問をするのみであった。服薬コンプライアンスも不良で、たびたび服薬指導を要した。しかし、通所開始2ヶ月目頃より付け句遊びに興味を示し、標語風な句を多数制作するようになった。語彙の多さや難しい漢字を知っていることを、他メンバーやスタッフに認められ、次第に言語的交流が増えていった。それに連れて、活動プログラムへの参加も少しずつ可能になってきた。

症例2：21歳，女性，無職

診断名：精神分裂病

現病歴：中学3年時に発病。泣き騒ぐ、いらいらして食器や家具を壊すなどがあり入院となった。3ヶ月の入院後、外来通院を続けていた。19歳時に、べらべらしゃべり続けたり感情の起伏が激しくなる。会話は連合弛緩が著明で、話のつじつまが合わない状態が続き2回目の入院となった。入院後しだいに落ち着きを見せ、院内からの試験通所を経て、外来デイケア通所を開始した。服薬コンプライアンスは良好であった。デイケアでの経過：通所当初より、緊張は強いものの何とか活動プログラムをこなすことはできていた。しかし、話し掛けられれば返答をするものの、自ら他者との交流をする場面は見られなかった。また、嫌なことや不満があると、物にあたったり態度に示すだけで言語的に表現できないでいた。通所3ヶ月ころより、付け句遊びに興味をもちだし、特定のメンバーと掛け合いで句作りするようになる。年齢相応の女性らしい内容の句が多く、それらの話題を取り上げるにより、次第に他者との言語的交流が増えてきた。通所1年を経過するころにアルバイトを始めることができた。

症例のまとめ

症例1は、「サザエさんの家族は何人ですか」などのステレオタイプな質問を一方的にする以外は言

語的コミュニケーションがなく、奇異な動作とあいまって、他メンバースタッフともに対応に難渋していた。しかし、付け句遊びへの参加により、他者の下の句に反応できることや語彙の多さなどが分かり、対応できるきっかけを得る事ができた。症例2においても、掛け合いでの句作りが他者との相互的な交流のきっかけとなり、しだいに言語的な自己主張が出来ることに結びつく契機となったと考えられた。

考 察

精神科デイケアにおける、五七五型の句形を用いた「しりとり形式」の付け句遊びを紹介した。俳句・連句療法は、句会という場や集団を媒介にした集団療法的側面。出来上がった作品を間において患者と治療者の間で行われる作品の推敲を通しての個人精神療法的な関わりが強調されることが多い⁴⁾。しかし、今回報告した付け句遊びは、俳句療法の変形と考えることもできるが、デイケアの活動プログラム外の遊びと位置づけ、治療者が積極的に関わらない自由な句作という形式で活動を行ってきた。そのことが、本来のデイケア活動プログラム枠に入りにくい、あるいは他者との直接的な交流を取りにくいメンバーには取り付きやすい「試し」の場⁵⁾ となったと考えられる。また、五七五定型という表現形式は伝統的形式でなじみがあり¹⁾、語数の制限は言語的コミュニケーションの不得手なメンバーには保護的で作りやすい安全な枠組み⁴⁾ として働いたものと思われる。一方、下の句取りという形式は、他者の前句を受け、それを発展させることが求められる表現形式である。そのことが他者との相互的な関わり契機として働いたとも考えられた。

要 約

遊びを通したコミュニケーションを図ることを目的とした、精神科デイケアにおけるしりとり形式の付け句遊びを紹介した。治療プログラム外の自由な句作のため、個別な治療操作が行いにくいという限界があるが、治療プログラムへの導入、言語的コミュニケーションのきっかけとしては簡便で有用な活動と考えられる。馴染みやすい五七五定型・下の句取りという表現枠も安全で有効な表現形式であると考えられた。

キーワード: デイケア, 俳句療法, コミュニケーション

しかし、本活動は、従来行われてきた俳句・連句療法のような、集団の利用あるいは治療的推敲という場面を通しての「今、ここ」での直接的な治療操作が行いにくいという限界がある。今後は、これらの限界に配慮しながら、活動プログラムとの有効な組み合わせなどを考えていく必要があろう。

ま と め

遊びを通したコミュニケーションを図ることを目的とした、デイケア室掲示板利用のしりとり形式の付け句遊びを紹介した。活動プログラム外の自由な句作のため、個別な治療操作が行いにくいという限界があるが、活動プログラムへの導入、言語的コミュニケーションのきっかけとしては簡便で有用な活動と考えられる。馴染みやすい五七五定型・下の句取りという表現枠も安全かつ有効な表現形式と考えられた。

本報告の要約の一部は、日本デイケア研究会第3回大会で発表した。

文 献

- 1) 徳田良仁: 俳句・連句の持つイメージの力, 俳句・連句療法, 創元社, 1990
- 2) 浅野欣也: 連句による治療の試み, 芸術療法, 14, 7-14, 1983
- 3) 田村宏: 連句療法による躁うつ病の治療経験, 芸術療法, 19, 31-40, 1988
- 4) 飯森眞喜雄: 俳句療法の理論と実際—精神分裂病を中心に—, 俳句・連句療法, 創元社, 1990
- 5) 山根寛: 精神障害と作業療法, 三輪書店, 1997
— 1998. 11. 3. 受稿, 1999. 1. 8. 受理—